



小池 光選

遺影にはこの写真だと決めている蝶ネクタイの第九の私 神戸市 寺尾 隆志

【評】第九はベートーベンの第九だろう。合唱隊の一員として歌ったことがある。黒服に蝶ネクタイを締める写真がお気に入りだ。遺影の選択もなかなか悩めるもの。ふいにきて家中見渡しわが娘「頑張ってるね」と監督願する 狭山市 古谷真利子

【評】一人暮らしの母だろう。ときに娘がやってきて、状態を検閲する。心配していたよりもきれいだ。異状なし。監督願されるのは少し腹が立つけど。貧しさを忘れるように枕辺にたんだ晴れ着おさな日の除夜 横浜市 桃井 恒和

【評】お正月がくるので晴れ着を枕元に畳んでおく。昔々の思い出。いまの子たちはまずこんなことしない。輝いていたお正月。「ふわふわの毛糸のやうな皆さんは」中学の師の一声忘れず 市川市 伊東香野子

一行の詩みたいだね夕ぐれにつんと来て鳴く小鳥らは 成田市 神郡 一成

少年に将来の夢は石ころと書かしめし者の罪は問はずや 富岡市 長友 育代

猫抱いて小春の土手に座りたり草刈り済みしまろやかな土手 鹿嶋市 加津牟根夫

縫い物で生きたる祖母が時として我が子叩きしというこの鯨尺 和歌山県 助野貴美子

コンピニへ熊鈴ならし杖ついて毎日通う遍路のひとへ 千葉市 まのみこ

近隣と深く関わり持たずして冬に入りゆくひとの暮し 東京都 根本 亮子

栗木 京子選

今年また手作り注連は諦めむ日向の縁は暖かなれど 八王子市 齋賀 勇

【評】正月に玄關などに飾る注連縄。麦わらや麻ひもなどで手作りするのは大変である。以前は日の当たたる縁側で作成していたのだが。諦めきれない気持ちで下句から伝わる。ほつちの味受け継ぎし妻逝きて今年の冬の寒さ身に沁む 川崎市 北沢 圭人

【評】ほつちとは山梨を中心とする地域の郷土料理。具や麺やだしなど、各家庭で味が受け継がれている。味を守ってきた妻が逝って寂しい冬になってしまった。結句が切ない。晩酌のあてにと畑より葱を引き白き部分を七輪に焼く 匝瑳市 椎名 昭雄

【評】自身の畑で育てた葱を七輪で焼く。シンプルでありながら、こんなに贅沢な酒の肴はない。「あて」という表現が小粋である。野うさぎを追ひし狐の跡のあり雪の野に生くる二つのいのち 群馬県 真庭 義夫

それでいよと言ってほしくて聞きたくて耳をすませる仏壇の前 生駒市 横井 節子

焼き栗を売れる露店の人達は寒風にも作務衣で元氣 箕面市 手島 愛雄

背高の立ち枯れわらびに降る雪はひとひらすべりひとひらすもる 千曲市 米沢 光人

天折の詩人の作に惹かれて詩とは何かを問ひやまぬ古稀 東金市 山本 寒苦

観にきてと友より電話 一昨年嫁に出したクリスマスローズ さいたま市 五十嵐宣子

御仏に帰依せしなりと鬼子母神 柘榴は赤きつぶつぶ晒す 城陽市 近藤 好広

俵 万智選

朝な朝な抱擁するがにカーテンを丸めるための腕を廻しぬ 福島市 大槻 弘

【評】朝ごとにカーテンを開け、丸めて、留める。ありふれたルーティンが「抱擁」という比喩で、いっきに素敵に感じられる。大きな窓と、しつかりした生地も思い浮かぶ。ゆっくりと過疎化してゆくふるさとの団地には咲きつばなしのパンジー 東京都 鳥さんの臉

【評】花壇の手入れをする人も、花を愛でる人も減るいつぶらなのだ。「咲く」ではなく「咲きつばなし」の一語で、それが的確に、そして寂しく伝わってくる。鍵盤の和音の間隔うまいく人間関係あらわすかのよう 東京都 関根ともみ

【評】なるほど、隣り合わせの鍵盤を鳴らしても不快な音になる。二句切れ。うまい比喩を、シンプルに差し出して成功した。ぐみみたいな種明かしさえされぬまま静かに消える小さな光 静岡市 海瀬安紀子

人生はおとな時代が長いのにごも時代代の濃さに勝てない 上尾市 関根 裕治

その人の声を届けてあげなくて微かに音を立てる文章 東京都 大王グループ

百円で東京行つて釣りがあふるかも載ったおまけまである 大和郡山市 四方 護

憂鬱な検査前夜に母は言う「明日になれば歌になる」って 堺市 一條 智美

先生は元氣だろつか教わった計算尺に積もるとしつき 大阪市 原 拓

遠き日に母がババロアを作った型がどこかに仕舞われており 千葉市 佐藤 綾子

黒瀬 珂瀾選

便座にて放屁の臭ひ拡散をせず直接に吾が鼻を打つ 船橋市 米山 正久

【評】お上品な歌ではないけど、思わず笑いました。「拡散をせず」と生真面目に書いたところに、市井のボエエジとでも言うべき感覚があります。よほど臭かったのかな……。仏壇の引出しにある古手紙の母の小言を陰干ししたり 高崎市 熊沢 峻

【評】大昔の母が書いた、説教の手紙を読み返す。小言を陰干しするという表現が面白いです。亡き母の言葉の思い出出すことで、いま現在の自分をまた見つめ直すのでしょうか。「新宿に着いたらすぐに電話して」消せぬ留守電にき妻の声 東京都 佐藤 一郎

【評】こちらも故人の言葉。何気ない、用件だけの一言。それが最後の肉声として、この世に残る。言葉には命の記憶が宿るのです。いつ死んだとさえ知らぬ同胞も働いて働いて働きまくった 千葉市 鈴木 啓子

餅つきも機械に頼るわが家なり昭和百年矢のごと過ぎる 南丹市 中川 文和

亀岡の町のこそこ木犀の香る家あり霜月の午後 尼崎市 十河 清

這ふたびにもふも靴下ぬげる子の足を追ひたりスチーフ焚く朝 鹿嶋市 大熊佳世子

何気ない仕草が親に似ていると言われてつづく古里の鍋 古賀市 砂山ふらり

東京のひとはなんだか正直で来てと言うけど来てはくれない 市原市 十条 坂

暗譜まで道のり遠しウクレレを繰り返し弾く朝な夕な 瑞穂市 渡部 芳郎